

白井聡『武器としての「資本論」』

まとめ——新自由主義の打倒

(白井聡, 2020, 武器としての「資本論」, 東洋経済新報社, 東京.)

原稿：<http://everything-arises-from-the-principle-of-physics.com/post-capitalism>

新自由主義の打倒

【新自由主義】市場の競争原理に委ねて利潤獲得を追求する政策

- 「規制緩和」「小さな政府」「福祉削減」「緊縮財政」「民営化」「自己責任」「選択と集中」「アウトソーシング」「雇用の脱正規化」
 - 「負け組の自業自得」という自己責任論は哲学的に支持し得ない
(Spinozaの自由意志否定論, 標語的には「実力も運のうち」)
- 「競争が社会を発展させる」は事実認識からして誤り
 - 競争のペースに合わせた商品開発は小手先の変化ばかりに(スマホや冷蔵庫)
 - 画期的な新技術はすぐに模倣されるため,
一時的な利潤しかもたらさず, イノベーション競争はイタチごっこ
 - 仮に事実だとしても「競争するべきだ」とは言えない(Humeの“法則”)
- グローバル化 → 途上国の安価な労働力を使い倒す
- 「人間の価値=資本に奉仕するスキル・能力」というイデオロギー

第1講 本書はどんな『資本論』入門なのか

資本主義は続くよ, 永遠に!?

- マーク・フィッシャー「資本主義リアリズム」
- フレドリック・ジェイムソン
「資本主義の終わりを想像するよりも、
世界の終わりを想像することの方が容易だ」
- フランシス・フクヤマ「歴史の終わり」

使用するテキスト

岩波文庫版の『資本論』(向坂逸郎訳), 原著の第1巻
マルクスが自ら出した第1巻で基礎的な概念が展開されている

資本主義(資本制)

富 → 商品

マルクスによる資本制社会の定義

「物質代謝の大半を商品の生産・流通(交換)・消費を通じて行う社会」であり、
「商品による商品の生産が行われる社会(=価値の生産が目的となる社会[G-W-G'])」

【note】かつては誰もがアクセスできるコモン(共有財産)だった社会の「富」は悉く「商品」に姿を変え、我々はお金を稼がなければ、もはや生きていくことはできない。

第3講

後腐れのない
共同体外の原理 「無縁」

第4講 新自由主義が変えた人間の「魂・感性・センス」

【新自由主義(ネオリベラリズム)】

市場の競争原理に委ねて利潤獲得を追求する政策

「規制緩和」「小さな政府」「福祉削減」「緊縮財政」「民営化」

「自己責任」「選択と集中」「アウトソーシング」「雇用の脱正規化」

1980年代～

「資本家階級の側からの階級闘争」

「持たざる者から持つ者への逆の再配分」

魂の包摂(資本主義の価値観を内面化)

新自由主義の価値観: 「人間の価値=資本に奉仕するスキル・能力」

第5講 失われた「後ろめたさ」「誇り」「階級意識」

『男はつらいよ』の主人公「寅さん」
「階級上昇したい」という気持ちと、
「階級上昇に対する後ろめたさ」の間で葛藤



資本主義に魂を包摂された世代は、理解できない

第6講 「人生がつまらない」のはなぜか

「仕事がなくして無一文」な「自由な労働者」

齋藤幸平「ゼロからの『資本論』」第2章での「二重の意味で自由」の説明

- 生産手段・共同体の相互扶助から“フリー”（切り離されている）
→ 労働力を売ってお金を手に入れることでしか生きていけない
- 「自分は自由で自発的に働いている」という自負
→ 資本家にとって都合のよい労働者像を、あたかも自分が目指すべき姿だと思込込ようになっていく（「魂の包摂」（白井聡））
 - ◆ 実際には、労働力を売ってしまえば、後は奴隷と変わらない
 - ◆ そもそも形而上学的なレベルでは、人間は行為の自由な主体ではあり得ない
自由意志は現代的な宗教

第6講 「人生がつまらない」のはなぜか

教育の商品化

- 1970年, 国立大学の授業料は年額約1万円(アルバイトすれば苦学できた)
 - 70年代前半から, 大学の授業料が値上げ
- 学生たちの監視を親たちが代行してくれる

(内田樹, 2020, コモンの再生, 株式会社 文藝春秋, 東京, pp.48—55.)

ドイツでは教育も医療も無料(福祉国家)

【note】

- 授業に授業料分の価値があるとは限らない(使用価値と交換価値の違いに対応)
- 授業に出ずに独学しても良い

必要な物より

使用価値 ← 「具体的有用労働」(具体的な労働内容)

「売れそう」なもの

(交換)価値 ← 「抽象的人間労働」(賃金で測られる)

資本 = 価値の自己増殖の“運動”

||

G-W-G' (お金が目的)

資本主義以前 W-G-W' (お金は手段)

※G:貨幣(Geld), W:物(Ware)

第7講 すべては資本の増殖のために

G 給料 ← 「必要」の弾力性

|| ← 等価交換

W | 日分の労働力 (具体的有用労働)

^ ← 剰余価値の搾取

G' 実際の労働により生産された価値
(抽象的人間労働)

【note】資本家の支払いと等価交換されているのは、
例えば10時間分の「労働力」であって、その時間内で行われた実際の「労働」ではない。

第8講 イノベーションはなぜ人を幸せにしないのか

- 「必要労働時間」…自分のために働いている時間(労働力の再生産に必要な労働時間)
- 「剰余労働時間」…他人のために働いている時間(→剰余価値を形成)
 - 絶対的剰余価値 ← 労働時間の延長
 - 限界がある. 体制側による救済措置は搾取を持続させるため.
 - 相対的剰余価値 ← 必要労働時間の削減, 労働力のダンピング
 - ◆ 特別剰余価値:イノベーションによって生産コストを下げ, 商品を廉売することで得られる利益

【GAFA】IT業界の独占企業, Google, Apple, Facebook, Amazon の総称
本来, 共有地であるサイバー空間を不当に囲い込み, レント(賃料)をとって儲けている

第8講 イノベーションはなぜ人を幸せにしないのか

「競争が社会を発展させる」は事実認識からして誤り

- 競争のペースに合わせた商品開発は小手先の変化ばかりに(スマホや冷蔵庫)
- 画期的な新技術はすぐに模倣されるため、
一時的な利潤しかもたらさず、イノベーション競争はイタチごっこ
- ◆ 仮に事実だとしても「競争するべきだ」とは言えない(Humeの“法則”)

● ブルシット・ジョブ(クソどうでもいい仕事) ↔ 高収入

- ケインズの予想した余暇社会が訪れないのは、際限なく価値増殖を求める資本主義が大量の無意味な仕事を作り出しているから

● エssenシャル・ワーカー ↔ 低賃金, 長時間労働

【ブルシット・ジョブ(BSJ)】

被雇用者本人でさえ、その存在を正当化しがたいほど、完璧に無意味で、不必要で、有害でさえある有償の雇用の形態である。とはいえ、その雇用条件の一環として、被雇用者は、そうではないととりつくりわねばならないと感じている。(グレーバー)

BSJの典型例は広告業, 行政官, コンサルタント, 事務員, 会計スタッフ, IT専門家などに多く、概ね情報関連部門に対応する。

第9講 現代資本主義はどう変化してきたのか

● 20世紀後半のフォーディズム型資本主義

➤ 労働者を消費者としても扱う → 労働者階級も富裕化(中流階級化)

➤ テイラー・システム, 科学的管理法

単純作業の「実行」のみを担う労働者は,

「構想」する機会を奪われ, 資本家の下でしか働けなくなる(斎藤幸平)



1970年代以降に挫折



● 21世紀の新自由主義(ネオリベリズム)

労働者の脳を鍛えてイノベーション競争に動員(認知資本主義)

→ しかし特別剰余価値は一時的な利潤しかもたらさない(第8講)

→ { 労働者の既得権益を剥奪し, 労働力の価値を引き下げる(ダンピング)
グローバル化(途上国の労働力を使い倒す, 絶対的剰余価値を追求)

第10講 資本主義はどのようにして始まったのか

資本制社会の下でモノが安くなる ⇔ 労働の価値が低下する

労働者に長時間労働を強いたり, 人件費をカットしたりする弊害

- 「セブンペイ」の不正使用問題
- ボーイング社の新機種 of 航空機737MAXが2機, 立て続けに墜落した事件

資本主義の始まる条件 = 「本源的蓄積」

一定の資本の蓄積と, よるべなき「はじまりの労働者」が会うこと
「はじまりの労働者」を生んだ「困り込み」

【note】 資本主義の始まり(本源的蓄積)は一回きりの出来事ではなく,
形を変えて幾度となく繰り返されてきたと考えられる [詳しくは第11講] (p.173, p.206).

第11講 引きはがされる私たち

日本における本源的蓄積

土地売買の解禁, 地租改正に次ぐ, 松方デフレ(明治時代前半)

ロシア文学に見る本源的蓄積(19世紀)

- ゴーゴリ『死せる魂』…貴族や地主たちが農奴を売り飛ばす
- イワン・ゴンチャロフ『オブローモフ』…帝政ロシアはインテリを活かせず
- チューホフ『桜の園』…「土地の商品化」の物語

第11講 引きはがされる私たち

労働力の価値の引き下げ(労働価値のダンピング)
賃下げ, 新自由主義の下での脱正規化・アウトソーシング



現在進行形の本源的蓄積

いずれは戦争による, 人の土地からの引きはがしへ

【note】

- 人口減においても資本主義は「人間の替わりはいくらでもいる」人口過密地を作り出し(本源的蓄積), 延命を図るだろう。
- 現代日本における新卒一括採用や, 就職情報産業による情報管理などは「求人に対して圧倒的に多い求職者」を人為的に創り出すために行われている。(内田樹ほか, 2022, 撤退論——歴史のパラダイム転換において, 株式会社 晶文社, 東京, pp.37—49.)

第12講 「みんなで豊かに」はなれない時代
第13講 はじまったものは必ず終わる

【note】

階級闘争, マルクスの「社会主義」について

マルクス自身, 国家権力を奪取する**革命の困難さを認識**し, アソシエーション(自発的な民主的連帯)を通じたボトムアップ型の社会変革を重視するようになる。斎藤幸平は**アソシエーションを通じて, 社会の富を「脱商品化」し, 「コモン」として自治管理**することを訴えている。これこそがマルクスの構想した「社会主義」ないし「 Kommunismus」であり, ソ連や中国のような独裁的な「国家資本主義」とは異なる。

マルクスの「唯物史観」について

生産力を発展させていくことが, 歴史を高い段階へと進めていく原動力だとする歴史観。晩年のマルクスは原古共同体が平等や持続可能性を保持していることに気づき, そのような歴史観と決別する。

(斎藤幸平, 2023, ゼロからの『資本論』, NHK 出版, 東京, 第5—6章. 特にpp.179—180, p.193.)

「稼ぎが低いのは**スキル・能力**がない人間の**自己責任**であり，人間としての**価値がない証拠**」という**新自由主義**のイデオロギーと戦え